

吉文字屋本浮世草子と白話小説

丸井, 貴史

<https://doi.org/10.15017/4742071>

出版情報：雅俗. 17, pp.90-104, 2018-07-17. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

吉文字屋本浮世草子と白話小説

丸井 貴史

白話物浮世草子とその作者

明和三年（一七六六）冬、浮世草子の主たる版元であった八文字屋は、所有する板木の多くを升屋大蔵に売却した。升屋は以後数年間にわたって八文字屋本の再板本を印行するが、その成果は思わしくなく、安永二年（一七七三）十一月、ついにそれらの板木を手放し始めることになる⁽¹⁾。

こうした出来事背景に、八文字屋および升屋における経営戦略の失敗があったことは否定できない。しかしそれ以上に、浮世草子の需要減少もまた大きな要因であったろう。その意味において、八文字屋本板木をめぐる書肆の動向は、確かに近世小説史における時代の転換を象徴するものであった。

ただし、八文字屋本の終焉が必ずしも浮世草子そのものの終焉を意味するわけではない。周知のとおり、明和・安永以降においてもなお、複数の書肆が新作の浮世草子を刊行しているのである。一般に「末期浮世草子」と称されるそれらの作品群は、概して高い評価を与えられてはいないが、個々の作家・作品に対してはなお検討の余地が残されている。手始めに、長谷川強の指摘を以下に挙げてみる。

当期の浮世草子は明和にはなほ多くの作が刊行されてゐるし、以上の如き多様な作があった。しかし演劇の衰退により気質物が復活し、白話小説流行に乗じてはその翻案を行ひ、その流行と西鶴ら旧時の浮世草子回顧が結びついて（例へば「東雲鳥」の如き）雑話物とただ新しい拠りどころを求めての多様であった。マンネリズムに陥つた浮世草子は自らの中に新しさを生み出す事が出来ず、ただ目先の奇を求め、他力によつてこれを成就しようとする⁽²⁾。

注目すべきは、「白話小説流行に乗じてはその翻案を行ひ」の一節である。長谷川はこれについて「目先の奇を求め」たものと否定的な評価を下しているが、白話小説の翻案という創作手法は、当時新興の初期読本に顕著なものであった。白話小説の翻案が、新たな小説ジャンルを生み出す営為であったにもかかわらず、なぜ浮世草子におけるそれはかくも否定的に捉えられているのであろうか。この問いは、「浮世草子」と「読本」の根本的な差異が那辺に存するかという問題や、そうしたジャンル区分の有効性を問い直す議論とも深く関わるものであるが、本稿ではその前段階として、浮世草子における白話小説翻案の諸相を検討してみたい。

白話小説を翻案した浮世草子（以下「白話物浮世草子」と称する）

の刊行で知られるのは、当時、大坂最大の書肆であった吉文字屋である。まずは吉文字屋本浮世草子のうち、白話小説の利用が指摘されている作品とその原話を刊行順に示しておこう（*以下が原話）⁽³⁾。

① 朧月子 『時勢花の枝折』（宝暦十三年（一七六三）刊）

* 「錢秀才錯占鳳凰儔」（『醒世恒言』巻七・『今古奇観』巻二十七）

② 来義庵南峯 『人間一生三世相』（明和三年（一七六六）刊）

* 「盧夢仙江上尋妻」（『石点頭』巻二）

③ 来義庵南峯 『唐土真話』（安永三年（一七七四）刊）

* 「郭挺之榜前認子」（『石点頭』巻一）

④ 大雅舎其鳳 『滅多無性金儲形氣』（安永三年（一七七四）刊）

* 「軫運漢巧遇洞庭紅」（『拍案驚奇』巻一・『今古奇観』巻九）

⑤ 大雅舎其鳳 『本朝三筆伝授鑑』（安永六年（一七七七）刊）

* 「唐解元玩世出奇」（『警世通言』巻二十六・『今古奇観』巻三十三）

⑥ 大雅舎其鳳 『太平記秘説』（天明二年（一七八二）刊）

* 「玉簫女再世玉環縁」（『石点頭』巻九）

ところで、吉文字屋本浮世草子には基本的に作者が明記されておらず、さしあたり序者を作者に比定するのを通例とする。右に記した作者名も同様であるが、その筆名についてはいささか複雑なところもあるので、ここで簡単に整理しておく。

まず大雅舎其鳳は、『名槌古今説』『西海奇談』（ともに明和八年（一七七二）刊）などを著した荻坊奥路、ならびに『三千世界色修行』（安永二年（一七七三）刊）の作者自陀洛南無散人と同一人物であることが、濱田啓介によって指摘されている⁽⁴⁾。それに先んじて、奥路と南無散人が『修行金仙伝』（明和八年（一七七二）刊）の作者佐川了伯で

あることも中村幸彦によって指摘されており⁽⁵⁾、これらの説が正しければ、吉文字屋本浮世草子の主要作者であった其鳳・奥路・南無散人・了伯は同一人物であったということになる。さらに濱田は「一応存疑として置く必要がある」と述べつつ、来義庵南峯もまた同一人物の可能性があることを示唆していたが、それを裏付けるかのように、「来義庵其鳳」名義の浮世草子『敵討会稽錦』が近年発見され⁽⁶⁾、研究の進展が期待される状況にある。

朧月子については、『絵本源氏物語』（寛延四年（一七五二）刊）の序文に「酔雅亭朧月子」の署名が見え、奥付にも「文校 酔雅朧月」とあることから、三代目吉文字屋市兵衛の酔雅と同一人物であるという山本秀樹の指摘がある⁽⁷⁾。山本はさらに、本作は酔雅一人の手によって書かれたものではなく、其鳳が下請けをしていた可能性についても言及しているが、それに対しては篠原進が慎重な態度を示している⁽⁸⁾。以上のとおり、吉文字屋本浮世草子における作者の実体には、いまだ明確になっていない点が残る。今後の研究が期待されるところであるが、本稿では作者の問題にこれ以上立ち入ることなく、右に挙げた白話物浮世草子の内容と創作手法に焦点を絞って論じてみたい。

『時勢花の枝折』の趣向

吉文字屋本白話物浮世草子の中で、最も成立が早いのは『時勢花の枝折』（以下「花の枝折」）である。作者の朧月子は、その序文において本作を「人のこゝろをやはらぐる大和歌の枝折⁽⁹⁾」として、「恋路の山のまことある儀のかみふりにしこと」を書き集めたものであると

述べているが、物語の筋は多くを白話小説「錢秀才錯占鳳凰儔」(以下「錢秀才」)に拠っている。原話の内容は、顔俊という男が容貌美麗の誉れ高い秋芳を妻にしたいと思ったものの、秋芳の父高賛が才貌兼備の婿を求めていることを知り、自分の代わりに従弟の錢青を嫁迎えに行かせるが、役人の取り調べによってすべてが明らかになってしまい、結局錢青と秋芳が結ばれることになる、というもので、この作品の眼目が、自分以外の男を利用して妻を迎えようとするという奇抜な発想と、姑息な欺瞞はいずれ露見し、幸福は誠実な者のもとに訪れるという教訓にあることは明らかであろう。

問題はその翻案である『花の枝折』が、「大和歌の枝折」として書かれたということである。白話小説はいかにして和歌の手引書に紡ぎ直されたのか。まずは物語の内容を、少し丁寧に確認しておこう。

(巻一)大坂の吉田主水は学識があり風雅を解する男であるが、生活に困窮したため従兄の丹波屋伝左衛門のもとに身を寄せる。主水は下女の千代に恋文を送られるが、猥りがわしいことは慎まねばならないと言って拒む。千代への返事を書いた主水が居眠りをしていると、友人が梅の花見に誘いに来る。主水はその道中、一人の婦人に心を奪われる。(巻二)主水は白菊という名のその婦人に恋文を送り、契りをおわす。その夜、二人は和歌に託してそれぞれの思いを語り合う。別れの朝、出雲大社の末社の神が現れ、白菊がいずれ主水の妻となることを告げたところで目が覚めて、主水はこの逢瀬が夢であったことを知る。話変わって、阿波の富田屋久右衛門は、才貌兼備の男に娘の蘭を嫁がせたいと考えていた。(巻三)蘭を妻にしたいと考えた伝左衛門は、商人の大和屋長右衛門に仲人を頼む。伝左衛門は自分の代わりに

顔合わせのため阿波へ行つてほしいと主水に頼み、主水はしぶしぶ承諾する。久右衛門は主水の学識と人柄に惚れ込み、蘭を娶せることを決める。(巻四)主水は蘭を迎えるため再び阿波へ赴く。しかし嵐のため大坂へ帰る船が出せない。やむなく久右衛門の一存によって阿波で婚礼を挙げることとなったが、主水は一度も蘭と同衾することなく三夜を過ごす。奇妙に思った蘭は和歌で主水に思いを伝える。(巻五)すでに婚礼が行われたことを聞いた伝左衛門は、大坂に戻った主水を激しく打擲する。久右衛門と伝左衛門の手代同士が争い始めたとき、役人が通りかかり関係者を引き立てる。取り調べの末、主水と蘭を正式な夫婦とすることが決定した。伝左衛門には婚儀の費用をすべて負担することが命ぜられ、長右衛門は追放の刑に処された。

この梗概からも窺えるとおり、本作は千代・白菊・蘭という三人の女と吉田主水の恋をめぐる物語である(ただし白菊は夢中の人物)。しかし原話「錢秀才」に登場する女は、本作の蘭に対応する秋芳一人のみであり、千代と白菊の物語は作者が独自に創作したものと推測される。そこでまず考えるべきは、巻一・二の大半を占めるこの創作部分(本作においていかなる意味を持っているかということであろう)。

巻一に登場する千代は、「とし十七になりしが、すこしは歌もよみ、手跡しめざきなどもつたなからず、きりやうも十人にはすぐれてさいはつもの」と評されるように、比較的教養のある女である。彼女は主水を見て恋に落ち、和歌の添削依頼にかこつけて「浅あかはかにもらしや染んともわがしのびはつべきおもひならねば」という歌を手渡す。

興味深いのは、この直後に「つくぐうたのこゝろを見るに、こひしのびであれど、こがる、こゝろのふかきに今はしのぶる事のなりが

なければいひいづべし、とふかくおもひ入てよみたりし」という一文が添えられていることである。このように「うたのこゝろ」を解説する例は随所に見られ、主水の返歌「世にもれん人のためこそなげかるれたゞわれのみのうき名ならねば」にも、「もし名のたゞば、その身ばかりかこなたの身のうへもあしかるべし、と浮名をおそれてのへん歌なり」という解説が附されている。この二首はさほど難解なものとも思われないが、それにもかかわらずこうした記述がなされるのは、やはり「大和歌の枝折」であるがゆえのことであろう。

この返歌を見た千代は主水の真意を測りかね、次は恋文を渡すことにする。その文面もまた歌語が散りばめられたものであるのだが、重要なのはこの手紙が【図1】のとおり散らし書きされているということである。

物語の登場人物が散らし書きの手紙を書くこと自体は特に珍しいことではないが、それはたとえば多田南嶺『勸進能舞台桜』（延享三年一七四六）刊）のように、「さしよりよみて見れば、おもひがけなき女筆のちらしがきにて」(卷二の

著作権保護のため図は非表示



図1 『時勢花の枝折』巻一、四丁裏・五丁表（『大惣本稀書集成』第一巻、臨川書店）

三）などと本文にその旨が記されるのみで、本作のごとく実際に散らし書きされた版面を持つ作品は珍しい。ここには作者・書肆による何らかの意図が込められていると見るべきであろう。

注目されるのは、この手紙の読み順が丸囲みの数字によって示されていることである。こうした処置は、伊勢貞丈『安斎隨筆』巻一「女文散し書」に「近き頃は、三べん返し五へんがへし七へん返し九へんがへしなど、て、その手本をかき、朱にてよみ様の次第のしるしに一二三の文字を付けたるあり。是れは世に拵へ出したる物にて取るにたらざる物なり。故実に非ず」とあり、高井蘭山『消息調宝記』巻一にも「ちらし書の文は一二の印を見て心得給ふべし。長き文は其間へわりこみいく段にも書ことなり」とあることからすれば、散らし書きの「手本」においてはしばしば行われていたようであり、【図2】の『女文字宝鑑』（正徳三年一七二三）刊）や【図3】の『女教文章鑑』（寛保二年一七四二）刊）などの女子用往来物に、『花の枝折』と同形式のものをいくつも見出すことができる。

ただしこれらはあくまで散らし書きの「手本」であり、貞丈がそれさえも苦々しく思っていることに鑑みれば、実際の手紙においてこうした処置が施されることはほぼな



図2 『女文字宝鑑』（『女筆手本解題』、青裳堂書店）



図3 『女教文章鑑』（『往来物大系』第92巻、大空社）

かったと考えてよからう。すなわち【図1】の版面は読者に散らし書きの書法を示すためのものであり、【図2・3】の女子用往来物と同様の性格を持つものといえるのである¹⁴。そして興味深いことに、この直後に同輩の下女が千代に代わって主水に書いた手紙はさらに分量が増えており、巻二において白菊が主水へ送る手紙にいたっては、もはや読み順が示されなくなる。このように難易度を徐々に上げていくことで、読者の読解能力向上を促しているようにも見える。

以上の検討によって導かれるのは、吉文字屋が本作の読者に女性を想定していたのではないかとという仮説である。では、往来物の趣向が利用されることの必然性は何に求められるのだろうか。尾上和也によれば、吉文字屋の出版物の傾向は当主によって変化するものの、往来物に限っては初代以来変わらず定期的に刊行されており、中でも女子用消息型の出版件数が最も多いという¹⁵。無論、散らし書きの文例集も『女用文章唐錦』（享保二十年（一七三五）刊）、『女要文章宝鑑』（明和三年（一七六六）刊）など多数存し、その改題本も少なくない。すなわち『花の枝折』における往来物利用は、往来物が吉文字屋本の主

要商品であったことと深く関わっているのである。

それでは次に、白菊の物語における趣向について検討しよう。主水は白菊に一目惚れして恋文を送るが、後家となつている白菊は、「女のみちをまもり候ころ」を理由にそれを拒む。しかし、主水が再び切なる思いを伝えると、白菊はついにそれに応える意思を示す。そして約束の晩、主水が白菊のもとを訪れると、彼女はまず歌を詠みかけ、主水はそれに返歌する。さらに、契りを交わした後も二人は次々と歌を応酬し、主水が部屋を出ようとしたりと彼らの夢は覚めるのである。

すなわち二人の恋の過程は、その大半が手紙あるいは和歌のやりとりによって表現されているのであり、こうした形式の先蹤としては、書簡体恋物語の『薄雪物語』が想起されよう。そして現に『絵本婚禮手引草』（明和六年（一七六九）刊）附載の「女可をんひのもてあそぶべきしよもくろく 翫書目録」で、本作は「薄雪物語うすゆきものがたりにならふて物がたりにうたのよみかたを記す」と紹介されているのである¹⁶。

では、『薄雪物語』の趣向が利用されたのはなぜであろうか。市古夏生によれば、近世初期に古活字本として成立したこの仮名草子は、整版本が刊行され流布していく過程において、次第に艶書の文範としての「実用性」が注目されるようになったという¹⁷。つとに松原秀江によって指摘されていた、『女世話用文章』（元禄十三年（一七〇〇）刊）や『女童子往来』（正徳五年（一七一五）刊）といった女子用往来物の頭書に『薄雪物語』の本文が刻されているという事実は¹⁸、それを裏付けるものである。すなわち、このように女性向けの実用書として享受されてきた一面を持つ『薄雪物語』は、女子用往来物としての性格をあわせ持つ『花の枝折』にとつて、恰好の素材であったのである。

こうして「大和歌の枝折」として作られた本作は、作品末尾に「恋歌百題百人一首」と題して百首の恋歌を列挙するが、実はこれもまた、吉文字屋という書肆の性格と密接に関わっている。吉文字屋は往来物だけでなく、歌書の刊行にも力を入れていたのである。特に酔雅が当主であった時期には、百人一首の刊行が盛んであった¹⁹。宝曆十年（一七六〇）に『古今百人一首歌仙織』を刊行すると、翌年それに口絵を追加して、『風雅百人一首金花袋』ほか六種の改題本を刊行しているのは²⁰、そのことを端的に示す例であり、当然「女可翫書目録」にも、多くの百人一首の広告が並んでいる。『花の枝折』における最大の趣向は、物語の中に吉文字屋主要商品の要素を盛り込んだ点にあったといえよう。

『時勢花の枝折』と白話小説

次に考えるべきは、原話「銭秀才」がいかにして和歌の手引書に変質したかということであるが、その前にもうひとつ、原話とは無関係な千代と白菊の物語がどのように蘭の物語に接続しているかということを確認しておきたい。

巻二の後半、白菊の父母が自分に会おうとしていることを聞いた主水は、事実が露見することを恐れて困惑する。そこへ出雲大社の末社の神が現れ、白菊との逢瀬は将来における「ちぎりのむすび」であり、やがてそれに思い当たる出来事が起こることを予言したところで、主水は夢から覚める。

こうした託宣がある以上、次に登場する蘭には白菊の面影が投影さ

れており、白菊との契りが蘭と夫婦になることの予知夢であったことに主水が想到するであろうことは容易に推測できよう。しかし蘭と白菊には、容貌美麗であることと和歌に通じていること以外、共通点として特筆すべきものはない。また、二人が夫婦になった後、主水が末社の神の託宣を想起することもない。結論を言えば、蘭の物語は千代・白菊の物語から独立的に展開しているのであり、白話小説に基づく部分とそうでない部分との間には断絶があると言わざるを得ない。ただし、本作において最も重要な「大和歌の枝折」としての性格のみは、蘭の登場以降も維持されている。たとえば巻二の後半では、男たちが蘭に贈った恋歌のうち「いと切なるやさしきもの」六首が紹介されるのだが、ここでもまた歌意の解説がなされるのである。一首のみ例を挙げよう。

不憚人目恋 ひどめはやくらるる 今 いま ははや人目 ひとめ もなにかは は かりのせきとめが
たき袖 たきそで や見えまし 後撰集

おもひあまり、人めをしのぶともしのびがたき、といへるをいひかけて、そでや見へまじとよめり。は は かりのせきめいしよなり。

ここでは歌意の解釈に加えて、「は は かりのせき」が名所として知られる地であることも述べられる。言うまでもなく、『枕草子』において「た た こえのせきは、は は かりのせきとたとしへなくこそおほゆれ²¹」と言及された関であり、さりげなく読者に古典の教養を伝えようとしているかのようである²²。さらに、主水が伝左衛門の代わりに阿波へ赴く場面（巻三）、久右衛門と桃華斎（蘭の弟久之丞の学問の師）が主水の学識を賞賛する場面（巻三）、久右衛門が結納品を受け取る場面（巻四）、主水が同衾しようとしないうことを蘭がいぶかしの場面（巻

四)においてもそれぞれ和歌が詠まれるが、これらに相当する描写は原話にはない。作者はこうして随所に和歌を散りばめることで、白話小説に依拠している箇所においても、和歌の手引書としての要素が損なわれないようにしたのであろう。

では、肝腎の白話小説はどのように利用されているのだろうか。結論を先に言ってしまうえば、原話の地名や人名を日本のものに改めた他は、ほとんど何の改変も加えられていない。「大和歌の枝折」としての性格は、千代と白菊の物語においてすでに完成されており、蘭の物語は和歌が合間に挟み込まれることを除けば、白話小説の世界そのものでしかないのである。本作における白話小説利用とは、物語の枠組みを借りるということ以上のもではなかったと言わざるを得ず、白話小説が和歌の手引書に変質したわけではなかった²³⁾。千代・白菊の物語と蘭の物語との間に断絶があり、作品全体の整合性に綻びが見られるのは、ひとえにこの点に起因しよう。

それならば、作者はなぜ白話小説を利用したのであろうか。ここで確認しておきたいのは、吉文字屋は三代目酔雅の時代、ほとんど小説を刊行していないということである。『享保以後大阪出版書籍目録』を閲すれば、『花の枝折』成立以前に吉文字屋から刊行された書物のうち、小説としての体裁をとるものは『故実世語』『西播怪談実記』『世説麒麟談』『呬千里新語』の四作にすぎない。そのような状況の中で本作の刊行を試みた背景には、やはり何らかの契機があったと考えるべきであろう。そしてその契機こそ、おそらくは白話小説の流行であった。

『花の枝折』が成立した宝暦年間、白話小説の受容において大き

な意味を持つ時期といえる。岡白駒施訓『小説奇言』(宝暦三年(一七五三)刊)や沢田一斎施訓『小説粹言』(宝暦八年(一七五八)刊)などの訓訳本が相次いで刊行され、白話小説の読者層が大幅に拡大したのである。そして本作において利用されたのも、やはり『小説奇言』巻四所収の訓訳であった。その根拠となる例を三点ほど挙げておこう。傍線を附した箇所を比較されたい(〈花〉は『花の枝折』〈奇〉は『小説奇言』。〈奇〉の合符は省略)。

【例1】

〈花〉「また仲人のしうぎは外にしんづべし」とねんごろに頼んで立ちかへり、ほどなく銀五両つ、みて、つかいをもつて長えもんにろせんとしておくりけるが、(巻三・三ウ)

〈奇〉「説得成時、謝銀二十両。這紙借契、先奉還了。媒札花紅在^レ外」。尤辰道「当得^ン当得^ン」。顔俊別去不^ニ多^ク時^ニ、就^テ教^メ下^ニ封^ニ上^ニ五^ノ銀^ノ子^ヲ、送^リ中^ニ与^ヘ尤^辰上^ニ、(六ウ)

【例2】

〈花〉あまり此方のことをよくいわず、どちらへもつかぬへんたうな^どき、てかへりては、(巻三・四オ)

〈奇〉倘^シ他去^ル時^ニ、不^レ盡^シ其^ノ心^ヲ、葫蘆^ヲ提^テ回^リ復^シ了^レ我^ニ、(七オ)

【例3】

〈花〉かゞみをとりにて、まへから見たりよこから見たり、(巻三・四ウ)
〈奇〉取^テ鏡^ヲ子^ヲ自^ラ照^シ、側^メ頭^ヲ側^メ腦^的看^ミ了^レ一^ニ回^ヲ、(七ウ)

おそらく物語の創作に不慣れであった朧月子は、新奇な内容を持

ち、かつ訓訳がすでに存在する「錢秀才」を見出すことで、それに物語の筋を借りるという着想を得たのであろう。この安直な発想が前述のごとき結果を招いたのであるが、ここで注意しておかねばならないのは、本作以前に成立した短篇白話小説の翻案作品は、都賀庭鐘『英草紙』（寛延二年（一七四九）刊）以外には確認されないということである。すなわち『花の枝折』は、短篇白話小説の翻案という初期読本によく見られる手法を、結果としてこの時期すでに取り入れていたということになる。その意味において、本作は白話小説受容史の中に相応の位置を与えられねばならぬであろう。

ただし、庭鐘や秋成などの初期読本作家たちは、自作の読者として白話小説に通じた人物を少なからず想定していたはずである。翻案作品には原話との比較を経てはじめて理解される主題があり、前川来太『唐土の吉野』（天明三年（一七八三）刊）や森島中良『困草紙』（寛政四年（一七九二）刊）の序文における『英草紙』『繁野話』『雨月物語』などの出典考証は、それを理解していた文人あるいは白話小説愛好者たちの営為であった。こうした読者の存在が前提としてあるゆえに、初期読本の翻案はひとつの趣向として成立するのである。

それに対して、『花の枝折』の読者として想定されていたはずの女性たちが、作品の背景に白話小説が存在することに気づき得るとは思われない。本作にとつての白話小説は読者に向かって開かれておらず、創作の手段として、作者のためにのみ存在しているものなのである。ここに本作と初期読本との径庭がある。

ところで、吉文字屋三代目当主にして本作の作者である酔雅は、本作刊行から七年後の明和七年（一七七〇）に隠居する。そして四代目

の定隆が家督を継ぐと、吉文字屋は突如多くの浮世草子を刊行することになるのだが、その中に白話小説の翻案が少なからずあることは先に述べたとおりである。その素地が本作の成立にあつたということはあるいは言つてもよいかもしれない。

『滅多無性金儲形氣』における翻案

いま述べたとおり、四代目定隆は積極的に浮世草子を刊行する。その際、吉文字屋の専属作者として活動した²⁴人物の一人が大雅舎其鳳であり、彼が其鳳名義で初めて著した白話物浮世草子が『滅多無性金儲形氣』（以下「金儲形氣」）である。この時点で庭鐘は『英草紙』に続いて『繁野話』（明和三年（一七六六）刊）を刊行しており、上田秋成も『雨月物語』（明和五年（一七六八）序、安永五年（一七七六）刊）の序文をすでに書いていた。こうした時期に刊行された『金儲形氣』という浮世草子は、いかなる性格のものであるのだろうか。

本作は白話小説「転運漢巧遇洞庭紅」（以下「転運漢」）の翻案であり、これもやはり、和刻三言のひとつ『小説粹言』所収の本文を底本としていたことが、中村幸彦によって指摘されている²⁵。まずは原話の内容を確認しておこう。

財産を失い困窮していた文若虚は、近所に住む商人の張大に借りた金で洞庭紅という蜜柑を買いこみ、それを持って張大の貿易船に同船させてもらう。船は漂流して吉零国に流れ着くが、そこで洞庭紅が高値で売れ、文若虚は大きな利益を得た。帰り道、船がまたも遭難して無人島に漂着すると、文若虚は大亀の甲羅を見つ

けて船に運び込む。実はそれは龍の甲羅であり、福建に着くとベルシヤ商人の瑪宝哈が銀五万両もの大金で買い取った。文若虚は瑪宝哈の勧めに従い、福建に定住して富商となり、子孫に至るまで家は栄えた。

其鳳は翻案に際し、文若虚を嘉三次、張大を四郎兵衛、瑪宝哈を眼張という人物に改めた。『金儲形氣』は全五巻で、巻二以降は原話の展開をほぼ踏襲しているが、注目したいのは、嘉三次の父嘉兵衛の半生が描かれる巻一に相当する内容が、原話にはまったくないということである。そこで、巻一の内容を以下に整理しておきたい。

① 沖船頭をしていた嘉兵衛は日和見立ての名人であったが、四十一歳のとき天気を見誤り難船したため、引退して故郷に帰り商売を始める。

② ある好天続きの夏、雨が降ることなど誰も予想していなかった日に、かつての経験を生かして大雨を予見し、傘や草履を捌いて利益を得る。

③ 嘉兵衛は諸方から古銭を買い集める。その様子を見た人々が、古銭収集が流行しているものと思いきむと、嘉兵衛は古銭手引の番付を刊行してひと儲けし、これまでに集めた古銭も高値で売却した。

④ 豊作が続いて米の値が下がると、嘉兵衛は大量の下米を買い集める。ある年、大飢饉が起こり人々が困窮すると、嘉兵衛はその下米を安価で施して危難を救う。

これを見れば明らかのように、巻一に描かれるのは、嘉兵衛の商才や人柄が優れていることを示すエピソードばかりである。嘉三次が主人公であるはずの本作に、其鳳はなぜこのような内容を加えなければならなかったのか。興味深いのは、原話において文若虚が貧窮に陥つ

た理由が、次のように記されていることである（以下、原話の引用は『小説粹言』による）。

他亦自恃^ミ才能^ヲ、不^レ十分去^テ宮^ニ求^セ生産^ヲ、坐^{イナガラ}吃^{スレバ}、山^{モシ}空^シ、将^ニ祖^テ上^リ遺^シ下^リ千金^ノ家事^ヲ、看^{シテ}消^シ下^リ来^ル、以^テ後^ニ曉^ス得^ル家^業有^レ限^リ。看^ニ見^ル別^ニ人^ノ経^ヲ商^ヲ図^ル利^ヲ的^ヲ、時^ニ常^ニ獲^ル利^ヲ幾^モ倍^モ、便^チ也^ニ思^ハ量^ス、做^ル些^シ生^シ意^ヲ。却^テ又^テ百^ニ般^ノ百^ヲ不^レ着^ラ。

すなわち彼は自らの才を恃むあまり家業に精を出さず、それゆえに親の遺した財産を失ってしまったのである。同様の話型は近世小説にも多く見え、たとえば井原西鶴『日本永代蔵』（貞享五年（一六八八）刊）では、巻一の二「二代目に破る扇の風」をはじめ、二の三・三の二・三の五・五の三・六の一の六話において二代目が身代を傾けている。西鶴以後の作品を例にとっても、江島其磧『渡世商軍談』（正徳三年（一七一三）刊）巻三の三や『世間手代氣質』（享保十五年（一七三〇）刊）巻一の三など、同種の趣向は枚挙に遑がない。また、嘉三次の零落が描かれる『金儲形氣』巻二の冒頭、「長者に二代なしといへるは、いかなる人の格げんにや²⁶」という一節に類似する表現は、其磧『商人軍配団』（正徳二年（一七一二）刊²⁷）の「人間の盛衰はあざなへる繩のごとし。誠に長者二代なし²⁸」という書き出しをはじめ多くの作品に見出され、この話型が町人物浮世草子におけるひとつの典型であったことが、あらためて確認されるのである。そしてこれらの作品には、父親が身代を築くまでの過程が描かれることも少なくない。したがって『金儲形氣』において父親の描写がなされた理由のひとつは、そうした浮世草子の類型に合わせるためであったと考えられよう。

しかし、その上でなお問題として残るのは、なぜ作品全体の五分の一にも及ぶ分量を嘉兵衛の描写に費やさねばならなかったのかということである。作品の中心人物が嘉三次であるにもかかわらず、嘉兵衛をかくも詳細に描くことの必然性はどこにあるのか。

先に示したとおり、巻一では嘉兵衛が非の打ち所のない人物であるということが強調される。しかし実は巻二に至ると、嘉兵衛の欠点が一とつ明らかになるのである。

愛におぼるゝはなべてよの人のおや心なるに、ましてやひとり子の嘉三次ことなれば、あらかきかぜにもあてず、衣ふくはもめんをいとひ、ちよつと出るにもきぬを身にまとはせ、かうじやうなるげいかたにのみせいこんをいれさせ、自余のことはかまはせず。

すなわち嘉兵衛は嘉三次に仕事を教えることもせず、贅沢で気ままな暮らしをさせてきたというのである。それは「あきんどのくすの木といはるゝほどのあきなひ上手なれども、子ゆへには闇にしらぬ山路をたどれること」きものであり、瑕疵のないように見えた嘉兵衛でさえも子には甘くなつてしまふということが、巻一の語り口とは対照的に、批判的に述べられている。すなわち嘉兵衛は、商売上手で人柄もよいという長所と、かわいさのあまり子の教育に失敗するという短所が同居する人物として描かれているのである。

前述のとおり、本作は町人物としての要素を持つ作品であるが、同時に『滅多無性金儲形氣』という題名が示すように、氣質物の系譜にも属している。そこで想起されるのは、氣質物の実質的な嚆矢として知られる江島其磧『世間子息氣質』（正徳五年（一七一五）刊）の冒頭話「木賊売は心を磨正直な百姓形氣」である。この作品では、息子を

甘やかして育てていることについて親類から注意を受けても従わず、結局は放蕩癖のついた息子を勘当する父親の話が、神使いの小法師によつて語られる。そして小法師はそれを「皆親のとがぞかし」と言い、「およそ世界のあく人、親のしわざならずして、誰がわざといふべき」と厳しく批判するのである。

倉員正江によれば、この箇所は涼花堂斧磨『当世誰が身の上』（宝永七年（一七一〇）刊）巻一の三を踏まえたものであり、其磧は後の『善悪身持扇』（享保十五年（一七三〇）刊）中巻の一においても、同一箇所を利用していうという³⁰。其磧が子の養育に関する教訓的言辞を複数の作品で述べているという事実は、こうした教訓性が浮世草子に求められていたことを示しており、『金儲形氣』もそれに倣っているものと考えられる。

では、そのことをいまま少し検証してみよう。梗概でも示したとおり、原話の文若虚は張大らとともに吉零国に赴くのだが、それは文若虚が、生活に困窮している現実から抜け出して外国の様子を見るのも無駄ではない（「一身落魄、生計皆無。便附三了他們航海、看二看、海外風光、也不枉人生一世」と考え、自ら張大に同船させてもらえるよう頼んだために可能となったことである。しかし、嘉三次の場合はそうではない。

嘉三次がきんじよにあみや四郎兵へといふものあり。嘉三次がおや嘉兵へがせわにてしやうはい手びろく人にしらるゝやうになり、嘉兵へを父のごとくおもひうやまひたつとび、嘉兵へ死てもちも其おんをわすれず、命日ごとにはおこたらずとむらふほどのことなれば、嘉三次がるらうを見すてず、大かたわが方におきて

そりやくなくねんごろにみつぎたるぞたのもしきしかた也。(略)
あるとき四郎兵衛へ嘉三次に申すは、われら同しやうばいのも
もとだんじ、十人ばかりしぐみて、此たびしなくの絹の、其
外かすの代物をしこみ、これよりひがしふさうこくといふ所
へあきなひにまかるはず也。それにつき足下にはとうじなすわざ
もなき御ことなれば、われらと一しよに渡海いたされまいか、と
いふ。

すなわち嘉兵衛の助力によって商売を成功させることのできた四郎
兵衛が、その恩義に報いるため、嘉兵衛の子である嘉三次の力にな
うと同船を持ちかけるのである。現状を打開するための契機を自ら作
り出そうとした文若虚とは異なり、嘉三次は嘉兵衛の余光によって四
郎兵衛に手を差し伸べられたにすぎない⁽³¹⁾。それゆえ嘉三次が莫大な
利益を得たことも、「嘉三次が父嘉兵衛、正じきをもつぱらとしてかぎ
やうをおろそかにせず、しやうばいにぬけめなく、衆人のこんきやうを
すくひ、取たてつかはすことあげてかぞへがたし。一生がいの内つむ
所のみんとく、はたして子にむくひ、おもひよらざる大ふうきの身と
なれる嘉三次が心の内、うれしさいかばかりにや」と、嘉兵衛が積ん
だ陰徳によつてもたらされたものとされるのである。これが、親の行
いは子に報うという教訓となつていふことは言うまでもなからう。ち
なみに文若虚は、「存心忠厚、所以該有此富貴」(正直で情に厚い
からこそ、この利益が舞い込んだのだ)と仲間たちから評されており、
嘉三次に対する評価とは大きく異なる。

このように見てくると、『金儲形氣』は嘉三次の諸国遍歴と経済的成
功を描きながらも、最終的にはすべて嘉兵衛の話に収斂すると言つて

よい。嘉兵衛が甘やかしたからこそ嘉三次は零落したのであり、嘉兵
衛が陰徳を積んだからこそ嘉三次は豪商になれたのである。すなわち
本作は親たる者の心構えを説く教訓的な作品であり、誠実さと行動力
を兼ね備えた青年が航海の果てに成功を掴むという点を主眼とする原
話とは、主題を異にしているといえよう。其鳳は白話小説という新し
い素材を、浮世草子という既存の類型にはめ込んだのであった。

そして、このことと関連して想起されるのは、和訳太郎こと上田秋
成の『諸道聴耳世間狙』(明和三年(一七六六)刊。以下「世間狙」
卷三の二「身過はあぶない軽業の口上」に「転運漢」が利用されてい
るといふ高田衛の指摘である⁽³²⁾。高田はさらに、『世間狙』卷一の一・
二の一・二の二も白話小説の翻案であるとの主張を展開するが⁽³³⁾、そ
の妥当性についての検証はあまりなされてこなかった。それはおそら
く、高田が秋成浮世草子にとつての白話小説を、「典拠」としてではな
く、先行作品の類型とは異なる独自の発想を導く「媒介」と
して捉えていることに起因しよう。プロットや文辞の一致を重視する
従来の典拠論とは異なる観点からなされたこの指摘は、実証がきわめ
て困難なのである。

本稿もまた、高田の論の当否を論ずるものではない。しかし『金儲
形氣』を論ずる以上、「転運漢」を利用した可能性のある浮世草子につ
いて言及しないわけにはいかないだろう。

「身過はあぶない軽業の口上」は次のような話である。

大津の竹田周益が営んでいた薬店は、打身薬「勝劣散」が評判と
なったものの、周益には商売気がなく、貧窮のまま夫婦ともに破
した。女と駆け落ちしていた息子の三平は口が上手く、軽業の口

上師として評判を呼ぶ。しかし見世物師として失敗をおかし、大坂へ下ろうとしていたところ、人相見に医師が薬屋になるのがよいと言われて故郷へ戻る。そして勝劣散を得意の口上で売り歩くと、次第に評判が広まって繁盛し、名を大津屋四茂八と改めた。

この三平のモデルが、かつて「四郎八」の名で竹田からくりの口上師をし、その後「一平」として幫間となり、さらに「正勢散」を売り出して評判を得た上田近江であることは、中村幸彦がつとに指摘している³⁴。すなわち秋成は実在の人物を材としてこの作品を書いたわけだが、落ちぶれた主人公が商売を成功させて富豪になるという話型は確かに「転運漢」と一致しており、さらに主人公が口達者である点や、いずれ多くの富を得ることを人相見が予見している点なども共通する。高田が本作に「転運漢」の影響を看取したのは卓見であるが、ここで問題としたいのは、三平が富を得るに至った結果がいかに評されているかという点である。本作の末尾は、以下のように結ばれている。もとよりまや薬にもあらず、呑で功を見るもの多く、日まし夜ましに売ひろめて次第に手前よろしく、古郷なれば大津八丁札の辻に五間口の家敷をもとめて店つき花々敷かざりたて、(略)此身になりても零落には長町の宿なし住居、四も八もくはぬとて、名を大津屋四茂八と改めて、世をうらやすに暮すのも、親の光りは七光り。大津八丁の勝劣散とて近年の仕出しなるよし³⁵。

三平が商売を成功させることができたのは、商品を宣伝する口上の能力を有していたがゆえのことである。勝劣散の効能がいかに優れたものであったとしても、それだけで身代を築き得るものでないことは、父の周益が証明している。それにもかかわらず、本作の語り手は

三平の商才に評価を与えず、「世をうらやすに暮すのも、親の光りは七光り」と、すべては親の余光であると断ずるのである。

このように、子の人生を描きながらも最後は親に焦点を当てる語り方は、『金儲形氣』における翻案の方法と通じていないだろうか。参考までに、同じ作者が書いた初期読本『雨月物語』に視点を転じてみよう。たとえば「吉備津の釜」における磯良と正太郎の悲劇は、磯良の父が御釜祓の結果に従わなかったことに端を発し、「蛇性の姪」の豊雄が真女子に翻弄される憂き目に遭うのは、父が彼を「なすま、に生し立」^{たて}放任していたことに起因するとも読める。しかし『雨月物語』の語り手は、これら諸篇をあくまで彼ら自身の物語として最後まで語り抜くのである。これが『金儲形氣』や『世間狙』の語りのあり方と異なっていることは明らかだろう。

ここで浮世草子や初期読本の語りの類型にまで話を広げるつもりはない。重要なのは、『金儲形氣』と『世間狙』との間に類似性が認められたことにより、其鳳が白話小説の浮世草子化を志向していたことがあらためて確認された点にある。これは『花の枝折』の場合とは異なり、白話小説の翻案が創作の方法論として明確に意識されていたことを意味しよう。

其鳳による白話小説の利用は、すでに見たとおり必ずしも肯定的な評価を与えられてはいない。それはおそらく、白話小説の翻案を主たる創作手法のひとつとした初期読本が興っていたにもかかわらず、同様の方法を採用ながらも浮世草子の枠組みから脱却できなかったことによるのであろう。しかし其鳳にとつて、白話小説の利用はあくまで浮世草子を書くための方法として選り取られたものに他ならず、自作

を浮世草子の系譜に連ねることを、むしろ積極的に志向していたように思われる。そうである以上、其鳳の嘗為は、初期読本との比較によってではなく、末期浮世草子における独自の試みとして、一定の評価を与えられるべきであろう。

白話小説の受容層再考

最後に注目しておきたいのは、吉文字屋本白話物浮世草子の中に、『石点頭』の翻案が三作含まれていることである。ここまで検討してきた『花の枝折』と『金儲形氣』の原話は、訓訳本『小説奇言』『小説粹言』にそれぞれ収められており、唐話学を学んだことがなくとも内容を把握することはできる。しかし『石点頭』は訓訳本が刊行されておらず、この作品を読むためには唐本に直接あたる必要があった。本稿を閉じるにあたり、このことの意味について考えておきたい。

紙幅の都合で詳述する余裕がないため、『石点頭』巻二「玉簫女再世玉環縁」を其鳳が翻案した『太平記秘説』のみ簡単に取り上げる。原話は『雲溪友議』所収の「玉簫化」を原拠とし、元曲『兩世姻縁』などによって広く知られる韋皋と玉簫の物語である。翻案に際して、其鳳はまず舞台を南北朝時代に設定した。そして韋皋と玉簫の約束の品である指輪を守袋に改め、韋皋が科挙に落第するくだりを畠山義喬との戦闘に敗れるという内容に改変するなど、細部を日本風にした上で、物語の展開については原話をほぼ忠実に踏襲している。

右のような翻案は、原話の内容を正しく理解していなければ決してなし得るものではない。其鳳が自ら白話小説を読みこなしたのか、あ

るいは唐話学を修めた人物の助力を得ていたのかは定かでないが、浮世草子が生み出される文化圏に、白話小説を原文で受容することのできる素地があったことは確かであろう。

こうした白話小説受容のあり方は、初期読本作者のそれときわめて近い。『英草紙』『繁野話』や『兩月物語』に収められる作品の多くが、訓訳本の存在しない白話小説の翻案であることはよく知られていようし、南北朝時代の争乱を舞台とする発想もまた読本との共通点といえる。また、漢字を多用した和漢混淆文によって書かれる文体も、従来の其鳳の作品とは趣を異にしている。

千古の事跡をたづねんとほつせば、つねに万巻の書楼にともなへ
と、今も知己の友だち、和漢世々の紀伝軍史をもちよりに回読
して、春の日のねぶりをのぞく中に、南朝秘紀といへる書に一ツ
の奇怪の事跡をのす⁽³⁶⁾。

右は『太平記秘説』冒頭の一節だが、すでに示した『金儲形氣』の表記・文体と比較すれば、その違いは明らかだろう。

しかしその一方で、各巻章題の左脇に小字で内容を説明する目録の形式や、挿絵にいちいち教訓的言辞を附している点は、従来の吉文字屋本浮世草子と変わらない。つまり其鳳は、必ずしも浮世草子からの脱却を企図していたわけではないのである。

浮世草子と読本のいずれをも書いた人物として即座に想起されるのは上田秋成であるが、かつて長島弘明は、秋成が著した両ジャンルは地続きのところにあるとした上で、その読者層も大部分において重なっていると指摘した⁽³⁷⁾。近世中期の大坂文化壇において、「雅」の文化と「俗」の文化が未分化的であったという考え方は中村幸彦以来

のものであり³⁸、長島の説はそれを浮世草子と読本の読者層に適用したものと見えよう。そしてその「読者層」の問題を、「白話小説の受容層」の問題に置き換えて考えてみることはできないかというのが、本稿における最後の問題提起である。

浮世草子も読本も、小説である以上「俗」の領域に属するものであるが、小説というジャンルの枠内で考えれば、浮世草子に比して読本の方が「雅」に近い。そして白話小説を読みこなし、それを翻案して近世小説に仕立て上げるという手法は、文人たる読本作者の営為であると従来考えられてきた。しかし、浮世草子作者である其鳳が訓訳本のない『石点頭』を翻案しているという事実は、少なくともそうした認識の妥当性を再考するための契機となろう。また、正確な年次は不明だが、これと近い時期に和学者の富士谷成章が『石点頭』卷十三「唐玄宗恩賜纈衣縁」を翻案して、『白菊奇談』を書いていることも思い合わされる³⁹。白話小説の利用は、決して読本作者の専売特許ではないのである。

白話小説と読本の密接な結びつきは、すでに文学史の常識となり、そしておそらくそれゆえに、読本以外のジャンルと白話小説の関係性については、曖昧な認識しかなされないまま現在に至っている。この現状から脱却するには、初期読本が隆盛を迎えた近世中期における白話小説受容のあり方を、あえて読本中心ではない視点で一度捉え直してみる必要があるのではなからうか。本稿はそのひとつの試みであり、それを積み重ねることで、白話小説が近世文学にもたらしたものの本質も、少しずつ見えてくるはずである。

注

- (1) 中村幸彦「八文字屋本版本行方」(『中村幸彦著述集』第五卷、中央公論社、昭和五十七年)、山本卓「升屋の蔵版目録と出版―浮世草子末期における書肆升屋の動向(三)―」(『国文学』第六十二号、昭和六十一年二月)。
- (2) 長谷川強「浮世草子の研究」(桜楓社、昭和四十四年)第四章第三節「浮世草子衰滅期」。
- (3) ①は長谷川強「浮世草子の研究」(前掲)、②③④⑥は中村幸彦「読本発生に関する諸問題」(『中村幸彦著述集』第五卷、前掲)、⑤は濱田啓介「吉文字屋本の作者に関する研究―奥路・其鳳同一人の説など―」(『国語国文』第三十六卷第十一号、昭和四十二年十一月)による指摘。
- (4) 注(3)濱田論文。
- (5) 中村幸彦「安永天明期小説界に於ける西鶴復興」(『中村幸彦著述集』第五卷、前掲)。「修行金仙伝」の改題本が「三千世界色修行」である。
- (6) 菊池庸介「翻刻『敵討会稽錦』(一)」「『雅俗』第十二号、平成二十五年七月」。
- (7) 『京都大学蔵大惣本稀書集成』第一卷(臨川書店、平成六年)解題。
- (8) 篠原進「怪を談するの」ユートピア―荻坊奥路の位置―」(『青山語文』第三十九号、平成二十一年三月)。
- (9) 引用は『京都大学蔵大惣本稀書集成』第一卷(前掲)により、適宜校訂した。
- (10) 刊本には八文字自笑・其笑が作者であると記されているが、中村幸彦「多田南嶺の小説」(『中村幸彦著述集』第六卷、中央公論社、昭和五十七年)は、本作を「南嶺の代表作の一つ」としている。
- (11) 引用は『八文字屋本全集』第十八卷(汲古書院)により、適宜校訂した。
- (12) 引用は『改訂増補故実叢書』第八卷(明治図書出版)により、適宜校訂した。
- (13) 引用は『重宝記資料集成』第九卷(臨川書店)所収の影印により、適宜校訂した。

- (14) 女筆手本においてしばしば散らし書きの指南がなされることは、小泉吉永「近世刊行の女筆手本について」(『江戸期おんな考』第七号、平成八年九月)に指摘がある。
- (15) 尾上和也「大坂書肆の往来物出版活動——吉文字屋・塩屋一族を中心に——」(日下幸男編『文庫及び書肆の研究』、龍谷大学文学部日下研究室、平成二十年)。
- (16) 注(7)解題。
- (17) 市古夏生「仮名草子の読者をめぐる問題——『薄雪物語』『可笑記』『烏籠物語』——」(『国文学研究』第一四五号、平成十七年三月)。
- (18) 松原秀江「『薄雪物語』版本考」(『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』、和泉書院、平成九年)。
- (19) 注(15)尾上論文。
- (20) 「享保以後大阪出版書籍目録」(清文堂出版、昭和三十九年)。ちなみにこの時期における吉文字屋の出版物を確認するには、飯倉洋一他編「享保以後大阪出版書籍目録による吉文字屋市兵衛刊行年表稿」(享保から安永まで)(『飯倉洋一』「奇談」書を手がかりとする近世中期上方仮名読物史の構築)、二〇〇四～二〇〇六年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、平成十九年)が有用である。
- (21) 引用は北村季吟「枕草子春曙抄」(延宝二年(一六七四)跋刊)により、適宜校訂した。
- (22) ただし歌の後に示される出典は不正確で、ここに挙げた「今ははや」の歌は『新明題和歌集』(宝永七年(一七一〇)刊)から採られたものである。本作における和歌の出典表記に関しては様々な問題があり、別稿を期したい。
- (23) ただし、東京大学総合図書館所蔵の後修本(請求記号:Z14688)では、蘭と主水(埋木により人名は「五郎作」と改められる)が同衾しなかったことの証明に二人が詠み交わした和歌の短冊が用いられている(注(7)解題)。この改変後の本文では、白話小説に基づく部分においても多少は和歌が効果的に利用されているといえよう。
- (24) 注(1)中村論文。
- (25) 注(3)中村論文。
- (26) 引用は「京都大学蔵大惣本稀書集成」第一卷(前掲)により、適宜校訂した。
- (27) 刊年は中村幸彦「自笑其磻確執時代」(『中村幸彦著述集』第五卷、前掲)の考証による。
- (28) 引用は「八文字屋本全集」第三卷(汲古書院)による。
- (29) 引用は「八文字屋本全集」第六卷(汲古書院)により、適宜校訂した。
- (30) 倉員正江「浮世草子と教訓——其磻の気質物・町人物と『当世誰が身の上』——」(『雅俗』第五号、平成十年一月)。
- (31) 嘉三次が文若虚のように「しらぬくにのやうすを一期の思ひ出、こうがくのためともなるべし。そのうへぶらり三のひとりずみ、米たきぎのせわをとうぶんのがる、もくはつけいの一つ、くつきやうのこと也」と考えるのは、四郎兵衛に話を持ちかけられてからのことである。
- (32) 高田衛「わやく」と中国白話小説——「諸道聴耳世間猿」の構造——」(『定本上田秋成研究序説』、国書刊行会、平成二十四年)。
- (33) ここにいう「翻案」は、『雨月物語』における翻案とは性格を異にするものであり、高田はそれを「例えば『英草紙』、『繁野話』のとき、翻案具のペタンチシズムを、みずから露化するものではなく、その逆に、できるだけ、それを秘めようとするものである」と述べている。
- (34) 中村幸彦「秋成に描かれた人々」(『中村幸彦著述集』第六卷、前掲)。
- (35) 秋成作品の引用は『上田秋成全集』(中央公論社)により、適宜校訂した。
- (36) 引用は国立国会図書館所蔵本(請求記号:Z1122)により、適宜校訂した。
- (37) 長島弘明「『雨月物語』における作者・書肆・絵師・読者」(『秋成研究』、東京大学出版会、平成十二年)。
- (38) 中村幸彦「宝曆明和の大阪騒壇——列仙伝の人びと——」(『中村幸彦著述集』第六卷、前掲)。
- (39) 中村幸彦「白菊奇談と石点頭」(『中村幸彦著述集』第七卷、中央公論社、昭和五十九年)。

【附記】本稿は、平成二十九年度科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号:17J00121)による成果の一部である。